

□各地域別部会における 5 ダムについての調査検討に関する報告と
問題点整理について

中村正久 委員

丹生ダム意見書作成の主要な論点の整理

1. 意見の組み立て方、総論

＜意見書に求められているもの＞

- ・河川整備事業にとどまらず今後長期にわたる淀川水系の流域管理の姿を反映する判断が必要
- ・「地域住民の意見」や「地方公共団体の長の意見」とは異なった見地からの意見

＜河川管理者、地域、委員会の認識が一致している点＞

- ・「治水」と「地域社会の持続的発展」の重要性
- ・当初計画の利水容量は不要
- ・治水、環境、異常渇水時の緊急水の補給について、幅広い十分な検討が必要
- ・琵琶湖への影響配慮の重要性

2. 意見の組み立て方＜各論＞

＜異常渇水時、既往最大渇水における断水回避、緊急水補給、河川維持流量などの概念への疑問＞

- ・異常渇水時の緊急水補給量 4,050 万トンの根拠、とくに水需要管理や河川維持水量との関係
- ・BSL－1.5m を超える渇水時における多様な対策の可能性や政策判断のあり方

＜水位上昇抑制対策の方法と効果に対する疑問＞

- ・異常渇水が発生して緊急水の補給が必要な時期と、洪水リスクが高まる時期との関係
- ・瀬田川の改修、事前放流とダムによる水位上昇抑制効果の相対的な効果

＜瀬田洗堰の柔軟な操作の可能性について＞

- ・瀬田側洗堰の柔軟な操作の可能性と削減できるダム容量の大きさの検討

＜ダムに頼る治水対策の比較優位性の検討について＞

- ・ダムに頼らざるを得ない判断は十分な説得力を持っているか
- ・河道対策や流域対応がもたらす長期的、広域的な社会・経済的メリットの検討は十分か

＜環境に与える長期的・潜在的影響の大きさの判断と認識について＞

- ・（治水）ダムの建設が及ぼす環境への影響を判断する材料は不十分
 - ◆ 長期的かつ潜在的なマイナスの影響に対する考え方が甘いのではないか

＜河川整備事業の枠を超えた流域管理のあり方を反映する検討の必要性について＞

第 31 回淀川部会報告：大戸川ダムおよび天ヶ瀬ダム再開発についての審議状況

1 大戸川ダム

(1) 大戸川ダムの経緯

大戸川ダムは、当初、①淀川・宇治川・大戸川の洪水調節、②大阪府・京都府・大津市の新規利水、を主たる目的として計画されたが、新規利水が全量撤退の見込みとなったためか、基礎案では、①淀川・宇治川・大戸川の洪水調節、②保津峡上流亀岡地区の浸水被害の軽減、③琵琶湖の水位低下抑制に効果があるとされており、ダムの目的そのものが変更された。

流域委員会は、基礎案に示された効果の①については、大戸川の洪水調節については一定の効果が認められるものの、宇治川・淀川については限定的な効果しかない、②については、日吉ダムの利水容量を大戸川ダムに振替えることは、桂川の河川環境に悪影響を及ぼす恐れがあるうえに、利水振替の同等性にも疑問がある、③については、瀬田川洗堰の操作がもたらすものであるから、その改善がまず必要ではないか、との意見を示した。その後、河川管理者は②の保津峡上流亀岡地区の浸水被害の軽減については効果が小さいため採用しないとした。

今回発表された方針では、保津峡・岩倉峡を開削するまでは、大戸川ダムの宇治川・淀川の洪水調節効果は小さく、大戸川の洪水調節という治水単独目的では治水分の事業費が増加し、経済的に不利になるとして、「当面実施せず」とした。なお、同方針では、基礎案で効果があるとしていた琵琶湖の水位低下抑制についてはなんの言及もしていない。

(2) 今後の課題

1) 大戸川の治水

河川管理者が大戸川ダムの代替案としてこれまでに示したのは、①河道改修案(河道拡幅・河床掘削)、②遊水地案、③建物耐水化案、という項目のみであり、代替案を真剣に検討したとは認められない。

この度の淀川部会でも、将来大戸川ダムが建設されるようになったときに手戻りにならない、瀬田川への合流流量を現在よりも増加させない、といった方針が口頭説明されただけで、すべては滋賀県との調整にかかっているとして、誠意ある回答をしていない。

流域委員会は、大戸川ダムの代替案として、堤防補強・河道拡幅・河床掘削・河道内障害物の除去といった河川対応と、洪水氾濫想定区域内の一般道路や農道などの2線堤化・土地利用の規制誘導などの流域対応の併用を提案しているが、今後さらに検討したい。

2) 地域社会の修復

ダムによる水没予定地から移転を余儀なくされた住民への対応、地域の活性化への貢献として始められた付替剣道・市道などの地域整備事業をどのように継続していくか、河川管理者に誠意ある対応が望まれる。

2 天ヶ瀬ダム再開発

(1) 天ヶ瀬ダム再開発の経緯

天ヶ瀬ダム再開発は、当初から、①淀川・宇治川の洪水調節および琵琶湖沿岸の浸水被害の軽減、②京都府の新規利水、を主たる目的としており、今回の方針では、これらに③発電を加えた3つを目的として「実施する」としている。

天ヶ瀬ダム再開発はそれぞれの目的に対して確かに効果があるが、これらは名目上の目的であって、琵琶湖からの放流量を増加させることに最も大きな意義があると流域委員会は理解している。すなわち、天ヶ瀬ダム再開発は、琵琶湖からの放流量を増加させるため、瀬田川洗堰の放流能力の増大、鹿跳溪谷の流下能力の増大、天ヶ瀬ダムの放流能力の増大、宇治川塔の島地区の流

下能力の増大という一連の事業の一角であり、最も大きな効果が及ぶのは、琵琶湖の治水であり、利水であり、環境である。河川管理者はこれらの効果をなぜ前面に持ち出さないのか、理解に苦しむ。

(2) 天ヶ瀬ダム再開発の検討事項

1) 治水

- ・放流能力の増大量
- ・瀬田川の堤防補強
- ・放流能力の増大方法
- ・瀬田川洗堰の放流能力の増大方法
- ・鹿跳溪谷の流下能力の増大方法
- ・宇治川塔の島地区の流下能力の増大方法
- ・宇治川下流の堤防補強
- ・その他

2) 利水

- ・京都府の新規利水の必要性
- ・水需要管理との関連
- ・その他

3) 環境

- ・歴史的景観の保全(鹿跳溪谷)
- ・新たな景観の創出(塔の島)
- ・生態系への影響(宇治川・ダム湖)
- ・低周波騒音
- ・その他

以上

第3回木津川上流部会。意見交換会

「川上ダムについての調査検討」に関する部会の検討状況と問題点整理について中間報告

(1) 治水

①対象洪水の考え方について

既往最大規模洪水と既往最大実績洪水についての検討

→ 既往最大規模洪水によるダム必要性への疑問

②岩倉峡狭窄部の流下能力の検証について

実測流量観測値がない範囲での流量推定方法についての検討

→ 流量決定方法の幾つかの疑問点

(2) 川上ダムの三重県の利水について

三重県利水についての代替取水についての検討

→ $0.304\text{m}^3/\text{s}$ でバランスが崩れることへの疑問、水利権の調整・転用への積極的取り組みの必要性

(3) 川上ダム建設に伴う自然環境への影響について

①オオサンショウウオへの影響

ダム堤体下流域および前深瀬川・川上川の湛水予定区域の上流域において、引き続き繁殖活動は継続されとの調査結果に対する検討

→ 調査に有効な固体・固体群数、DNA の問題

②オオタカへの影響

ダム建設関連の使用予定区域とオオタカのつがいの行動圏の距離についての検討

→ 行動圏、営巣場所の変化に対する取り付け道路との距離の考え方、繁殖期の工事対応

③高山ダムでの浅層曝気について

浅層曝気によるアオコ対策効果についての検討

→ 鉛直一次解析モデルの妥当性の検証、浅層曝気による深層への影響

猪名川部会報告

余野川ダムに関連して以下のような事項について検討

1. 「当面実施せず」当面とは

→現時点では河川整備計画にはのせない

2. 銀橋上流の浸水被害軽減策を検討するときの対象洪水について

当初既往最大洪水（s. 35.8）でも検討したが、有効な対策（一庫ダムの利水容量を余野川ダムへ振替える案も含めて）を組み合わせても大幅な被害軽減がはかれず、また降雨の生起確率、地域的偏りなど特異な雨であることなどから対象洪水を既往第2位の s. 58.9 洪水および総合治水対策目標洪水で検討。猪名川部会も既往最大洪水を目標とするのは大きすぎるとの意見。

- ・特異な雨であることの定量的な記述を
- ・銀橋上流の浸水被害軽減を優先する
- ・河川整備計画の期間にできることをする
- ・長期的な目標は既往最大

→河川整備計画の中で猪名川流域にあつて優先して取り組むべきことは銀橋上流の浸水被害軽減であり、その対象は既往第2位。もちろん長期的な計画では既往最大に対応していくべきであり、既往第2位はステップの1つ。

3. 銀橋狭窄部開削による猪名川下流部への影響と対応策

s. 58.9 洪水、総合治水対策目標洪水に加え、目標洪水を越える洪水についても検討。具体的にはあらゆる洪水（既往洪水の倍率）を流して開削前後の水位差を見出し、河道掘削案と余野川ダム案による水位低減効果を提示。その際、開削前の水位を下回るような形で対策案を検討。比較評価の上、余野川ダムは当面実施せず。

- ・計算の前提条件や水位低減効果などについて補足説明を

→あらゆる洪水に対して壊滅的な被害を出さないことが流域全体の最終的な目標であるが、猪名川の河川整備計画にあつては銀橋上流の浸水被害軽減を優先する事から当面は狭窄部上流については既往最大規模洪水（ここでは s. 58.9 洪水および総合治水対策目標洪水）を目標。その対応策として狭窄部開削を行うが、それに伴う下流域水位上昇に対してはあらゆる洪水で検討し、開削前の水位を下回るような水位低減策を取り上げ、その比較評価から河道掘削案を検討。

4. 堤防強化

現堤防の点検評価、無堤防・緊急堤防補強区間の整備、浸透・浸食破堤防止策の導入、越水による破堤しにくい堤防強化については鋭意検討。

5. 堤防強化、河道掘削、狭窄部開削のタイムスケジュール

緊急堤防補強区間を含め直轄区間の整備完了には約 10 年。猪名川下流の河道掘削、狭窄部開削の完了までのスケジュールは現時点では未定。いずれにしても整備計画内には完了見込み。

6. 河道掘削、余野川ダムの効果発現時期

銀橋上流対策としての一庫ダム・余野川ダムによる対策案と銀橋開削・猪名川下流の河道整備による対策案を比較検討した結果、コスト面からは後者が有利。いずれも整備期間内に完了見込みであるがその効果発現時期の詳細については今後とも関係者との調整で確定させていく。

7. 河道掘削と環境

- ・干陸化した中州等において平常時の水位との差を小さくし、冠水頻度を高める掘削がメインになっているが、こうした中州掘削だけでよいのか。
- ・治水と環境との折合いは

- ・河川敷における運動公園との競合、運動公園は縮小の方向で
- ・低水路と高水敷の移行帯の整備は慎重に
- ・下流神崎川との整合を

などの検討事項

8. 余野川ダムを当面実施せずとしたときの課題、対応策は

- ・関連事業者、地元との調整、事後対応
- ・余野川の治水 など